近世地方地誌の生成と伝播

――鈴木秋峰『豆州熱海地志』を例として――

真島　望

一　緒言

近世地誌は、これまで歴史学の方面において歴史地理、もしくは文化史的史料として論じられるのが一般的であり、近年も多くの業績が蓄積されている。[1] 一方、それを文学研究の立場から扱う試みは、決して活発とは言い難い。[2]

しかし、近世地誌は説話の集積であるという内容的な特色を備えており、[3] これを散文史中に位置付けることは、近世文学史研究においても決して無益ではないと考えられる。それはすなわち、読本誕生の素地の一つであると目される所謂「奇談」説話群や、宝永・正徳頃から姿を見せる考証姿勢を強くもつ説話群との関係において、地誌の価値を見直すということにほかならない。[4]

そこでまずは近世地誌がいかなる情報を源として成っているのか、そしてその情報がどの程度命脈を保つのかということなどの、基礎的な事項を明らかにする必要があろう。これはまた近世的な「知」がいかに醸成され、そして拡散してゆくのか、またその後世における受容のあり方を窺う上でも一つの手がかりとなりうると考える。

本稿は近世前期の熱海についての漢文体の地誌、鈴木秋峰『豆州熱海地志』（元禄十三年刊、以下、『熱海地志』と略記することがある）を例として、その生成と伝播の一端を窺い、加えてこれまで文学研究では見過ごされてきた、作者鈴木秋峰の、芸文家としての紹介も試みようとするものである（論中の引用は、活字本以外はすべて適宜句読点などを私に補っている）。

二　鈴木秋峰『豆州熱海地志』について

本書はこれまで『熱海市史』上巻（其編纂委員会編、熱海市役所、一九六七年五月）や、その編纂係長であった太田君男氏による『熱海物語』（国書刊行会、一九八七年三月）に利用されたことがあるのみであった。[5] そこで、まずは煩をいとわず改めて書誌事項の整理から行いたい。調査には原装を保つ国立公文書館内閣文庫蔵の一本（請求番号一七三―一五二）を用いた（以下の本文引用もこれによる）。ただし、これは奥付を欠いているので、奥付とそれに関わる事項（構成・柱記・丁付）については、適宜同文庫蔵別本（請求番号一七三―一五一）によって補った。

二・一　書誌

○『豆州熱海地志』（元禄十三年刊本）

装幀　大本一巻一冊。四針袋綴。

表紙　原表紙。縦二十七・二五×横十九糎。肥後煤竹色無文様。

題簽　原題簽。子持枠に「熱海地志　完」（表紙左肩）。

構成　巻一…序文①（三丁）・序文②（二丁）・目録（半丁、ただし裏は絵図）・絵図（三丁半）・本文（二十六丁）・跋文（二丁半）・奥付（半丁、ただし跋文三丁目の裏にあたる）、総計三十八丁。

序文　序文①「豆州熱海地志序」（序題）、「元禄己卯秋七月武陵桃原野沂識／（印二顆）」（序末）。
序文②「豆州熱海地志自叙」、「元禄十二年金澤ノ鈴秋峰書ス／（印二顆）」（序末）。

内題　「豆州熱海地志」。

尾題　「豆州熱海地志畢」。

匡郭　四周単辺。縦十九・九×横十四・六糎（ただし本文一丁目表を計測）。

行数　毎半葉九行。

柱記　序文①に「《熱海地志　序」、序文②に「《熱海地志自叙」、目録・絵図に「《熱海地志圖」、本文に「《熱海地志」、跋文・奥付に「《熱海地志　跋」。

丁付　序文①に「一」～「三」、序文②に「四」～「五終」、目録・絵図に「一」～「四之終」、本文に「一」～「二十六終」、跋文・奥付に「一」～「三終」。

跋文　「後序」（跋題）、「己卯仲夏丹岳野必大識／（印二顆）[6]」（跋末）。

奥付　最終丁裏に「元禄拾三庚辰歳孟春吉祥旦／皇都　書肆　桐華堂　中村五兵衛茂通／蔵板」。

印記　正方角朱印「日本／政府／圖書」・同「大日本／帝國／圖書印」・長方角朱印「明治十二年購求」・同「莞齋蔵」・同「長鹽家蔵」。

備考　序跋・本文ともに漢文で記され訓点も施される。目録には、「熱海總圖」・「伊豆権現神社圖」・「日金山圖」・「形勝門」・「温泉門」・「山川門并嶋窟石井」・「神社門」・「梵宇門」・「墓塚門」・「土産門」が立項され（ただし「墓塚門」は本文に存在しない。各門の項目については後掲図表を参照）、冒頭の絵図は三点共に秋峰の手になる（絵図最終丁裏に「烋峰圖」）。なお、今のところ異版本・補刻本は見い出しえていない。また、書肆中村五兵衛は、後述するように、他の秋峰自身の作品や彼が和刻させたと思しき『三韓詩亀鑑』を刊行しており、何らかの交流があったものと思われる。

二・二　作者

その内容に立ち入る前に、ここで作者鈴木秋峰について先学の成果[7]もまじえながらまとめておこう。

鈴木秋峰、名は長頼、通称長兵衛・修理。秋峰は号。寛文十一年に将軍家綱に御目見を果たし、貞享三年には家督を継いでいる。祖父の代より幕府御大工頭であった（『寛政重修諸家譜』巻一二七）[8]。

生没年に関しては、『寛政譜』には記されず、網羅的な人名辞典としては現在最も大部である『国書人名辞典』第二巻（市古貞次ほか編、岩波書店、一九九五年五月）にも、「寛文―宝永（一六六一―一七一一）頃の人」とされるのみであるが、埋葬された市川市真間の菩提寺亀井院に伝わる蔵骨器に刻された墓誌が参考となる[9]。すなわち、

鈴木修理長頼姓穂積氏諱長頼
静軒長常之子。寶永二年乙酉十一月十九日於
營中罹病、二十一日寅下刻没。享年五十一。
於東叡山西麓龍泉寺、行喪葬之禮、火葬于千住、後葬遺
骨于總之下州

真間山弘法寺鈴木院舊曰瓶井坊後山先塋
傍又分少許埋于龍泉寺。　（前出『真間の里』による）

とあり、宝永二年没（享年五十一歳）と判明し、逆算して明暦元年の生まれと判断できるのである。

祖父長次は江戸城の数度に渡る改築諸工事に携わり、父長常も明暦大火からの復興事業で活躍して、江戸城復旧に尽力した一方で、秋峰（長頼）の大工頭としての主要な業績は元禄元年～三年の日光東照宮改修工事くらいであり、その日記からは江戸初期のような大規模な建築事業が著しく数を減らしたために、自分たちの職域の確保に苦慮していた様子が窺われるという（前出、保田晴男「鈴木修理日記――解説」）。

武鑑その他によれば、屋敷ははじめ神田橋門外にあったが、元禄十一年一月、御用地として召し上げられることとなり、その代替地として神田明神下の千本兵左衛門の屋敷を賜って同年二月以後これに住している[10]（『日記』巻三十四）。

秋峰は作事方でありながら、文事にも積極的で、人見竹洞（幕府儒官、寛永十四～元禄九年）を中心に人見氏一族と深く交流し（後述）、石田未琢（俳諧師、?～天和二年）を父の代から度々自邸に招じて俳諧に興じるなどしていた（ただし、秋峰自身の句は『日記』には見えない）ことが指摘される[11]。これのみでも文学史的に看過することのできぬ人物だと思われるけれども、これまで歴史学あるいは郷土史研究の他で特に触れられた形跡は無い。

編著としては『熱海地志』のほか、『本朝外考』（写本大本五巻五冊、貞享二年人見竹洞序）・『桑華詩編』（大本二巻二冊、貞享二年自序、同年京都中村五兵衛刊）・『倭賦引事』（大本二巻二冊、元禄十二年林鳳岡序、貞享三年自序、元禄十二年人見香山跋、同十三年京都中村五兵衛刊）などを著わし、朝鮮の『三韓詩亀鑑』（元禄九年序、同十一年京都中村五兵衛刊）の和刻本に序を寄せるなどしている。『熱海地志』を含め、学芸界の実に錚々たる面々から序跋を寄せられていることからも、この実務官僚の文事における実力と、当時の評価を知るに足る。

これらの作品に共通することは何か。それは歴史というものへの深い関心である。『本朝外考』は大陸の古今の典籍に見える本邦に関する記事を蒐集・羅列したもので、『桑華詩編』は言わばその詩文編と捉えうる。『本朝外考』の竹洞序文は、日本は周王朝の正統を継ぐ国家である可能性があるにもかかわらず「載籍存せず文献足らず。其の実未だ之を徴すべからず[12]」と慨嘆しており、それを補わんとする秋峰の試みを称えている。そこには本邦の成り立ちと源流を見究めたい

という意識が窺われるのである。『倭賦引事』もまた林羅山による日本史を概観した長大な詩賦の解説書の如きものであり、自ら「余、不敏と雖も史録に志有り」と宣言し、「誠に其の域に蠢生する者、其の父母の國事を知らずんばあるべからず」[13]と力強く述べるのであった[14]。かような歴史意識というのは、修史事業と並行してあくなき故事羅列としての詠史題詠が盛んに行われた初期林家[15]に通ずるものを感じさせ、秋峰もまたそれに近い立場にあったかと思わせる。

かかる人物ゆえ、そのほか指摘すべきことは多いが、紙幅の都合上伝記・事績の全体に渡る報告は他日に期することとして、次にその交友関係について見てゆこう。

既に一言したように、『熱海地志』について考える上で最も重要なのは、儒家人見家との交わりである。『熱海地志』に人見竹洞の男桃源が序文を寄せ、跋文は竹洞弟にあたる人見必大が担当し、『倭賦引事』には人見香山の跋文が備わることからも窺えるように、秋峰と人見氏には浅からぬ交わりがあったと思しい[16]。特に竹洞については、『熱海地志』「臨江亭」に「先師　野竹洞訪レ之作二隨心菴記一。見二博（マヽ）桑名賢文集一。故不レ録レ焉ニ」とあるのが目にとまる。「先師」という文言から両者の師弟関係にあったことは想定してよいだろう。ただ、竹洞門人が名を連ねるという詠史詩会の記録である『和漢雑仙』（貞享五年序）にはその名は見えない。

日記を検するに、竹洞の名が初めて確認できるのは延宝六年元日で、年始の挨拶廻りの相手先を列挙する中に、「元徳・友元」と見えている[17]。その前年の同日には「元徳」としか記されていないから、延宝五年中に交際が開始されたかと想像されるところだが、残念ながら日記中には該当する記事は見い出せない。

秋峰は自身の祖父長秋を顕彰する碑（「鈴近江翁碑」）をやはり真間に建立する（元禄六年）にあたり、その碑文を竹洞に依頼しており、竹洞はそれに応えて長秋・長常・長頼三代の事績を詳細に書き連ねていることからも、両者の親密さのほどが見てとれる。左にその一部を掲げる。

嗣子長頼、字は子恭、秋峰と號す。卯童より學を好み文を屬す。家に書萬巻あり。暇日南楼に坐して、手ら挍べ讀みて已まず。世余と隣交を爲す。今茲偶余に語りて曰く、「吾祖先の名を顕はさんと欲すれども、不才にして身を立て道を行ふこと無し。常に思ふ、一碑を總州葛飾郡真間山弘法寺に立て、以て不朽に傳へんと。請ふ卿筆

を下しその始末を叙べられよ」と。余爲るや世交はりて其の志に感ずるあり。豈に之を辞すべけんや（原漢文）[18]。

ここでも竹洞は秋峰の学問への姿勢を高く評価している。ところで、「余と隣交を爲す」とあるのは、先に述べた神田橋外の屋敷のことと思われるが、居所の近接が交流のきっかけとなったものか[19]。

二人の交遊はやはり詩の応酬が中心のようで、詩の添削を請い、あるいは竹洞の講釈の席に連なり（元禄五年二月十二日、『日記』巻二十七）、あるいは共に詩会を催す（同六年三月十八日、『同』巻二十八）などしている。秋峰の詩について竹洞は、「巻中六首に朱糸を加ふ、皆奇絶、嘉尚すべきなり」（延宝九年五月十四日、『同』巻十四、原漢文）とか「余、之を見るに、其の造語の巧みなるを奇とし、其の幽趣の弄を愛す」（同年六月九日、『同』巻十四、原漢文）などと、高い評価を与えている[20]。竹洞といえば、周知の通り林家の重鎮として名を馳せた一流の儒学者であるとともに、漢詩は当然のこと楽・書をよくするのみならず俳諧にも関心をもった風流人士であり[21]、かくのごとき人物と秋峰が親交を結び、その学識に一定の評価を与えられていたという事実は、この御大工頭を文学史中に置きなおすに際して、極めて重要なことと思われる。

三　『熱海地志』の生成――その情報源――

そうした旗本文人の手になる『熱海地志』はいかなる事情で成立したのか。本書の編纂については、自序に明らかであるので少々長いけれども全文を引用する。

豆州熱海地志自叙

余常に山水の僻有り。故に笠を芳野の春の花に戴き、筇を白川の穐風に曳く、且つ湘南二荒の行、数度に及ぶ。去歳、脚疾有り。官事鞅掌として疾を治するに暇無し。今茲、初夏幸に官暇を得て、來て温泉に浴す。乃ち地志を需るに、敢て記す者無し。是に於て嘆息する者久し。故に初めに温泉の効能・山川の形勝、乃至神社・梵宇を記し、終るに土産を以てす。略、編纂に渉る。皆な是土人の演説する所なり。余、來りて之を嘆じ、今渡して之を録せずんば、亦た後人をして復び後人を嘆ぜしむるなり。元禄十二年、金澤、鈴秋峰書す（原漢文）。

これによれば「脚疾」の治療のため熱海を訪れた[22]際、当地で地誌を求めたところ、得ることができなかったので、自ら温泉の効能・野山の形勝・神社仏閣の沿革や名産などについて、

当地の人々の直話をもとにして記したものだということである。

各部門とその項目の一覧（図1）を見ると、項目数では「山川門」が最も多く、分量では「神社門」に紙幅をさいているように見受けられるものの、同系統の部門同士（温泉＋山川、神社＋梵宇）で比較してみれば、分量に著しい差異は無く、ここから秋峰がいずれを重視していたかを探るのは難しい。

また、ここで先行作品との関係に目を転ずれば、本書以前にも熱海に関する書籍や絵図は存しており、刊行されたものも確認できる。すなわち、編著者不詳『豆州熱海湯治道知辺』（半紙本一巻一冊、序跋なし、元禄八年刊）・宮正葩著『熱海行記』（大本一巻一冊、元禄十年四月自序・自跋、元禄十年四月京都井上忠兵衛・江戸玉置治郎兵衛刊）がそれであるが、前者は著者の熱海への紀行文を中心に、温泉の入浴法や効能を付した案内記といった体のものであり、後者は純然たる紀行文であって、ともにそのような記述が皆無ではないとは言え、体系的にその土地の地勢や名所旧跡を解説した地誌とは認め難い。その点において『熱海地志』は、『熱海市史』も指摘する通り、近世熱海地誌の嚆矢と考えて差し支えあるまい。

これら先行作からの影響については、明白な引用こそ見受けられないものの、記載事項に重複も見られるので、何らかの影響を受けている可能性は否定できない（『豆州熱海湯治道知辺』は奥付に「於豆州熱海梓之」とある如く熱海における板行で、当地で秋峰も目にする機会があったかもしれない）。ただ、この種の作品において、その土地のランドマークに作者・読者の興味が集中し、重複が起こるのはごく自然な成り行きであり、記述の比較によって直接の影響関係が特定できない以上、ここではこれ以上立ち入ることはしない。

三・一　人見竹洞「温泉日新録」の利用

では、秋峰は序文に述べる通り、土地の人々の話を参考しつつ、すべてを独自に構築したのかと言えば、答えは否である。『熱海地志』には粉本とでも言うべき情報源が存在する。それは他ならぬ師の人見竹洞の文章である。

それを題して「温泉日新録」（『竹洞先生詩文集』前集巻十九所収、以下「日新録」と略記）という。これは、竹洞本人の識語に従えば、延宝元年、脚気の療養のため熱海に湯治に赴いた際の漢文の紀行文・日録で、体裁は純然たる地誌とはいえない

ながらも、名所旧跡の記事は詳細かつ豊富である。竹洞は熱海では今井半太夫（熱海本陣）方に宿泊し、その主や現地の猟師と交流して、当地の名所の由来や説話などの情報を得ている記事が散見される。

秋峰はこの「日新録」を全編にわたり利用している。序文にこそ明記しないが、その利用態度は典拠を明示する（「竹洞温泉日新録曰」〔形勝門〕）という、至極穏当なものである（若干例外もあるが）ので、ここでことごとしく指摘すべき新知見ではないにせよ、数少ない先行研究たる『熱海市史』などには『竹洞先生詩文集』は引かれておらず、「日新録」本文に当りなおした形跡は見られないから、今その利用の実態を明らかにしておく必要があるだろう。

引用箇所を拾い上げてみると（図2）、その利用はほぼ全部門に及ぶことが確認される。もっとも、引用の多寡に差はあり、少ないところではほんの数字の利用に過ぎず、「日新録」が無ければ執筆しえないというものではない。しかし、刊行当時既に故人となっていた（竹洞は元禄九年没）「先師」の文章を祖述することは、秋峰にとってある種のモチヴェーションとなっていたと想像される。

およそ二十二箇所に及ぶ利用のすべてを例示することはできないので、数例を対照させて、「日新録」をいかに自作に反映させているかを示すにとどめる（傍線稿者、以下同様）。

【例①】

○「日新録」（十月二十九日条）

曰根府川（中略）、川上有橋、渡橋有關、小田原城置戍衛、是海防要害之處。

←

○『熱海地志』「形勝門」

次根川村。川上架レ橋、橋前有レ關。是海防要害之處。小田原城主置戍衛以禁非常也。

熱海に至る道の途上にある根府川（現小田原市南西部）についての描写である。「有」と「架」などの用字や叙述順序を違えるだけで、内容に差はほとんど無い。

【例②】

a「日新録」（十一月朔日条）

下石徑数百級而出海濱。温泉之流繞岸而落。

b「日新録」（同月十二日条）

有二瀑、一在浴室之下、彫石貯湯。一則海畔按大石盤、温瀑漲落。野人樵子亦浴之。然浴者常洗石盤之中、故潔

而不穢。

←

○『熱海地志』「温泉門」　瀧湯

距熱海半里許。在伊豆権現祠之南。下a石徑数百級而出海濱噴出於巖石之中而流落海崖瀑布也。山號走湯者職此之由。b温泉有二瀑。一在浴室之中。彫石貯湯。一則海畔按大石盤温瀑漲落。野人樵子亦浴之。然來浴者常洗石盤之中。故潔而不穢也。

『熱海地志』の傍線a・bは、それぞれもと「日新録」の日を異にする二箇所の記述であり、これに多少の改変を施して、ひとつの記事として組み合わせており、かなり積極的かつ自覚的に竹洞の文章を利用しようという意図を感じる。また、ここは典拠を明記せず、一方でその使用の割合はこの項目全体の八割ほどに及んでいて、伊豆権現の傍らの名湯には自らの調査が及ばなかったかと思わせる。

【例③】

○「日新録」（十一月五日条）

有一掬之泉、c其清可鑑、d其冽如氷

←

○『熱海地志』「山川門」　多賀一杯水（抜粋）

方僅一尺餘之湫湄也。d其冽如氷、c其清徹可鑑毛髪。旱澇無盈縮。相傳云、源右幕下臨渇刀刺山。抜即泉涌也。

これは利用頻度最少の例。「多賀一杯水」なる念仏山に湧出する泉についての記述である。傍線部cはやや表現を異にしているけれども、その伝えるところに大差は無い。共通するのは八字に過ぎないが、この表現の一致は偶然の産物ではないであろう。そこにむしろ秋峰の恩師の遺文への強いこだわりを見ることができるのではないか。

三・二　人見竹洞「随心庵記」の利用

まずは竹洞の編章に寄り添おうとする姿勢は、これにとどまらない。「日新録」と同じ湯治療養の際に竹洞が撰した「随心庵記」（『竹洞先生詩文集』前集巻十二所収）もまた『熱海地志』の文章に活かされているのである。

【例④】

○「隨心菴記」

疊石為垣、編竹為壁。垣外繞栽、以岩桂長春、葉緑花紅

其高不過垣。有垣而自不設門。垣中平鋪細沙浄拂、無一點之塵。其屋方三四間。

←

○『熱海地志』「梵宇門（臨江亭）」

在絲川側。舊時念佛之僧隨心初所卜居。疊石為垣、編竹為壁。垣外繞栽、以岩桂長春。葉緑華紅其高不過垣。有垣而自不設門。垣中平鋪細沙浄拂無一點之塵。其屋方三四間。先師　野竹洞訪之作隨心菴記。見博桑名賢文集。故不録焉。隨心物故、其菴為潮湮没。塔澤僧秀巖来于熱海移其陳迹、締茅于今地。倣其舊製名曰臨江亭。

これに関してはまさに一字一句に至るまでの完全なる流用である。「随心庵記」は別の総集に見ることが可能なので「焉に録せず」、と述べるその直前に引用部があるのは御愛嬌というべきか。

竹洞は延宝元年に熱海を訪れた際に、当地に小庵を結び隠棲する念仏僧随心のもとを幾度となく訪ね[23]、その度に饗応を受けている。「随心庵記」はその小庵に寄せた文で、「日新録」（十一月九日条）に、例によって茶をふるまわれた後「海天渺々として、碧波席のごとし。余硯を引き小絶を作す。猶餘興有るがごとし、随心庵記を作す」（原漢文）とある。

この文は『竹洞先生詩文集』以外にも、右に窺える通り、『搏桑名賢文集』（林義端編、元禄十一年刊）巻一に収録されているほか、『走湯山縁起[24]』（外題は「走湯山什物」、写本）なる文書の集成にも一本が収められる。これは他本には見られぬ竹洞の識語を備えており、それによれば延宝五年随心が江戸に来訪した際、竹洞の手筆を請うたために与えたものという（末尾に「随心菴家蔵」と記される）。

四　後続作への影響

地誌である『熱海地志』が、いかに林家周辺の漢文作品の恩恵に浴しつつ編纂されたものか確認してきたけれども、そのように成った『熱海地志』自体は以後どのように継承・展開されるのであろうか。『国書総目録』未登載の写本『熱海言種』（享保二十一年成）を端緒として検討を加えてみたい。

四・一　寒川原清著『熱海言種』へ

『熱海言種』（以下『言種』と略記）は、熱海市立図書館蔵（請

求記号A二二〇―サム、引用もこれによる）。写本、大本一巻一冊、享保二十一年自序、編者自筆か。他に伝本無し。編者の自序を示しておく。

（前略）ひなの御つれ〳〵なぐさめ奉る言種ともなり侍れかしと思へる螻蟻のすこしき志に、臣原清智のつたなく、身の才なきをもはぢかへりみず、かしこにとひこゝにたづね、あるはいにしへ人のしるしおけるにもとづき、ひとつの巻となしてこれを献る。熱海の惣圖かつ伊豆権現やしろの圖・日がね山のづをあはせしるしけるは、みな佳景の地なれば、かきとゞめて御覧にそなへたてまつるといふ事しかり。おそれおの〻きかしこまり、つゝしんでもふす。

享保廿一丙辰年

五月吉日

武臣
寒川原清頓首

（印二顆〔図3〕）

省略箇所も含めて要約すると、享保二十一年、痔の療養のため熱海を訪れた主君に随った編者原清が、主君の徒然を慰めんと、土地の人々の生活や名所旧跡などについて、四方に問い訪ね、或は古書を引いてまとめたもの。ただし、巻頭の「熱海地図」・「伊豆権現社図」・「日金山図」から本文に至るまで『豆州熱海地志』からの引き写し（部門分けはなされない）で、文体は和文に改められている。一例を挙げよう、

○滝湯　熱海をさること半里ばかり。伊豆権現やしろの南にあり。石徑数百段を下り、海濱に出て、巌石の中よりほどばしり出づ。流れて海のきしにおつるの瀑布なり。山を走湯と号せるものは、もとこれによれるなり。

前節例②に掲出した「瀧湯」に対応する部分である。文体の相違のみで内容に手を加えた形跡は見られない。もっとも、浴室の様子を描写した後半部（傍線部bにあたる）が割愛されていることには注意する必要がある。

記事の取捨選択や新たに評言を加えた箇所もある（詳細は後述）とはいえ、序文には秋峰や『熱海地志』への言及は無く（ただし、本文中の「日新録」引用明記は残される所もある）、全体としては剽窃と称してよいほどの作物である（『熱海市史』はこの点を見落としており、本書を独立した一個の作品として位置付けている）。

編者寒川原清について簡単に触れておく。元禄十年生、元文四年没。名は辰清、またの名は原清、字は元水、通称儀太夫、梅墅と号す。近江膳所藩儒であったが、晩年讒言にあい

大坂に逃れ、その地で没した。和漢の学に通じ、特に神道に精通。伊藤東涯・並河誠所・井沢蟠龍・安積澹泊などと交流をもった博学の人であり、藩主本多康敏の命により大著『近江輿地志略』百巻（写本、享保十九年成）を編纂・献上した、言わば近世地誌の専門家として夙に知られる人物である。[26] 一般的には「辰清」の名が知られ、『近江輿地志略』を始めとしてその他の著作も「辰清」作であることが明示されるのが一般的であり、[27] それを敢えて「原清」と署名し、膳所藩儒という身分も伏せ「武臣」とのみ記したのは、やはり何らかのためらいがあったものであろうか。

とはいえ、そこは『近江輿地志略』を編纂したほどの地誌執筆に長じた人物であり、独自性が皆無ではない。一部に改変がなされており、そこに彼の『熱海言種』に込めた思いを見るべきだろう。改変方法は具体的には次の様に大別される。すなわち、

A　叙述順序の変更
B　省略・削除
C　加筆

の三つである。

Aは例えば『熱海地志』「形勝門」にあたる熱海から各地への里程を述べた箇所で、述べられる方角の順序が変更されたり、「梵宇門」において、『熱海地志』では「附録」として最後尾に置かれる「宮營遺迹」が「臨江亭」の次に配されるなどがある。Bの例としては、「水湯」・「風呂湯」（以上「温泉門」）・「観音窟」・「碁盤石」（以上「山川門」）が項目ごと削除されることを挙げることができるのみならず、その他の項目内部でも、読みやすく簡略化しようという意図なのか、しばしば省略が見られ、細かな異同も含めるとかなりの数になる。

しかし、重要なのはやはりCであろう。故事に関する評言などが加えられるわけだが、その内容にはある傾向を看取することができる。左にその一部を例示する。行頭の丸数字は、一覧（図4）のものと対応している。

①　空海、もし空海ならばか、る戯はなすべからず。土俗空海を賞ぜんとて却而空海に汚辱を蒙らしむ。空海、泉下に怨を結ぶべし。嗚呼天の覆ふところ、地の載るところ、陰陽によらざるなし。水火あらずといふことなし。いかんぞ水なしといふ地あらんや。黙して知ぬべし

（→「形勝門〔米噛村故事〕」）

⑥　人奇異とすれども、奇異にあらず。平左衛門と叫ぶに限るべからず。六左衛門なりとも八左衛門となりとも、叫

ば、同じく湧べし（→「温泉門〔平左衛門湯〕」）

⑧　なんすれぞしからん。たま〳〵碁盤に似たる縦横の畫ありし石ある故、これにて頼朝碁をうちたりし処なりといはゞ可ならん。世には奇怪の言を悦ぶもの多く、或は辨慶が足あと、或は義経の手のあと、其人の太刀あと、彼人の机の石と化したりしなんどいへるもの、国〳〵に多くあり。みな同日の妄談なり（→「山川門〔錦巌窟〕」）

右に引用した三例の表現（特に傍線部）に通底するのは、根拠の乏しい俗説をしりぞけようという姿勢である。土地の男女が業平井なる井戸の水に自分たちの影を映して婚姻の約束とするという習俗について「実に笑ふべし」（⑨「業平井」）と断ずるのもこの例に加えられる。客観的情報に基づいて科学的に考証し、巷間の妄説を排除してゆくような傾向は、原清が交流をもった井沢蟠龍に通ずるものと言うことができる。

これらと別系統のものとしては、

②　武家天下の権柄を握る基ひ、朝威衰るのきざし後白河上皇の不徳によるとはいへども、此地の戦、実にそれ根ざせり。史をよむもの、嘆息せずんば有べからず。彼與一は頼朝のために命を墜し、豊三は又與一がために其身を終ふ。品は大小にわかるれども、主君の為に死する志は一なり。頼朝、統一の後なんぞ與一が墓を封ずるにいとまなきや（→「形勝門〔石橋山故事〕」）

③　忠常もさしも大名なりしかば、殿宅玉をみがき、いらかをならべにしも、今は名のみ傳へて、其かたもなし。桃李ものいはず。誰とともにか昔を語らん。千歳の松も摧れて薪となり、川の瀬もかはり、山も田となり、田も池とかはれりと、詩人の吟詠せしも、時にとりて感慨なきにあらず（→「形勝門〔仁田忠常故事〕」）

を挙げることができる。この二例はいずれも、史実のいかんともし難い不条理や無慈悲な時間の流れというものを慷慨しており、原清の歴史への興味が垣間見えるが、それは安積澹泊との間で歴史に関する事項を中心とした情報交換が行われていた[28]ことからも窺える。秋峰とも共通する歴史意識が、地誌作者として聞こえる原清にも見い出されるというのは非常に興味深い。もっとも、地誌をものすることは、歴史の空間的推移に対峙することであり、歴史とは時間という空間の縦軸であるわけで、ことさら述べ立てるにもあたらないことかもしれない。

四・二　その後の展開―部分引用―

『熱海市史』も指摘するように[29]、『熱海地志』はその後の熱海地誌・紀行の諸作品に、『言種』の様に全面的というほどではないけれども、一部の記述が使用され続けてゆくこととなる。最後に、その一部を挙げつつ展開を追ってみたい。その際、参照するのは、成立順にⅠ『豆州志稿』[30]（十三巻、寛政十二年成）・Ⅱ『熱海温泉図彙』[31]（一巻、天保三年刊）・Ⅲ『豆州熱海誌』[32]（一巻、明治十一年刊）Ⅳ『熱海温泉図会』[33]（一巻、明治二十一年刊）の四種で、以下各書名上の番号（ローマ数字）で記すことがある。また、「日新録」・『熱海地志』はそれぞれ「日」「地」と略記する。

【例⑤】大湯の涌出頻度

地　異域安州ノ潮泉一日三溢三蘸、郴州・撫州・南川・天河・雅州諸泉、一日三潮之類耶。天地氣候有二不レ可レ窮者一也（「温泉門〔大湯〕」）

Ⅰ　按ニ中土安州ノ潮泉一日ニ三溢三蘸。又郴州・撫州等一日三潮ノ泉アリ。於二吾邦一他方未レ聞レ有レ之也（巻六）

Ⅲ　聞く支那國安州の朝泉は一日に三溢三蘸し撫州に一日三潮の泉あり（〇大湯）

『熱海地志』の傍線部の表現がⅠ・Ⅲに継承されている（ただし、郴を誤って彬としている）のは、並記してみると一目瞭然である。Ⅲには「伊豆誌に曰く」と『豆州志稿』（伊豆誌〔志〕」は別名）を引用する箇所がある（「〇行殿旧墟」）から、Ⅲの編者青巒はⅠ『豆州志稿』を介して『熱海地志』を利用したことになる。

【例⑥】錦巌窟内部の描写

日　有窟曰錦窟、停棹俯仰。窟中五彩、其影移波恰如織錦（十一月三日条）

地　有レ窟曰二錦窟一、停レ棹俯仰。窟中五彩、其影移レ波恰如レ織レ錦（「山川門〔錦巌窟〕」）

Ⅱ　窟の中の岩に五彩の色あり。波に映じて錦の如し（「▲錦の窟」）

Ⅳ　▲錦ノ窟ハ窟ノ中ノ岩ニ五彩ノ色アリ。波ニ映ジテ錦ノ如シ（「〇錦浦」）

この例は更に興味深い。延宝期の竹洞の文章（傍線部）が、長く時を隔てて、ほぼそのまま明治にまで受け継がれている様を見ることができるからである。

【例⑦】多賀一杯水

地　方僅一尺餘之湫湄也。其冽如氷、其清徹可鑑毛髪。旱澇無盈縮。相傳云、源右幕下臨渇刀刺山。抜即泉涌也（以下略、「多賀一杯水」）

Ⅱ　囲り僅に一尺余の小泉なり。冷なる事氷の如く、清徹なる事水晶の如し。伝ていふ、むかし頼朝、此地を過りし時、渇にのぞみ太刀をもつて山をうがちたるより、此泉を湧出たせしといふ。小泉なれども、如何ほどの炎赫にも乾事なき名水也（「▲多賀一杯水」）

Ⅲ　僅に尺餘の小泉なれとも、清く且つ冷なること水晶の如し。相傳ふ。右大将頼朝この地を過りしとき渇に臨て之を掬せりと（「○一杯水」）

先に例③で挙げたのと同箇所である。Ⅱ・Ⅲは「日新録」の表現を踏襲する泉の描写のみならず、頼朝がこの泉を湧かせたという故事までも『熱海地志』から移していることが判明する。『熱海地志』とかなり表現が異なるために引用はしなかったが、「日新録」にも頼朝故事は見える。にもかかわらず、その文言がⅡ・Ⅲに反映されないというのは、後人はやはり直接「日新録」を目にする機会はほとんどなかったということを示している。

【例⑧】伊東の怪魚

日　伊東之村温湯之畔有寺。寺有古池。池中有怪魚。巨細成群。大者三・四尺、其貌似鯉。色赤鐵面鋸牙、能嚙折鐵鈎。觀者怪之（十一月三日条）

地　伊東村中有温泉。來浴者多矣。温泉之側有寺。寺有古池。池産怪魚。巨細成群。大者三・四尺其貌似鯉色赤。鐵面鋸牙能嚙折鐵鈎。觀者怪之（「形勝門」）

Ⅱ　村の中に寺あり。その側に温泉あり。寺の池に魚あり。その形、鯉に似たれども鯉にあらず。大なるもの三尺、小なるは一二尺。其歯、鋸の如くにして、鉄釣を嚙きる事、糸を切るが如し。網を破る事、紙の如くなれば、里人も此魚を得たる者なしといへり。此池に限りて此魚あるも、一奇事といふべし（「○伊東崎の温泉幷怪魚」）

ここでは一字一句類似しているというわけではないけれども、京山の『熱海地志』の利用頻度を勘案すれば、これも利用の一例として数えて差し支えあるまい[34]。この話は当時諸人の興味を引いたようで、『錦字節用無窮成』（石川流宣作、正徳二年

刊か）に同話と思しきものが見られる[35]。

さて、『熱海地志』（及び「日新録」）の伝播の様子を大まかながら眺めてきたが（なお、Ⅰ・Ⅱに限れば、利用はここに挙げたものにとどまらない）、享保から明治に至る長きにわたり受容され続けたことが確認できた。もっともそれは、『熱海地志』自体が流布していたというよりも、後続の作品を媒介にしてということである。とりわけ、『熱海温泉図彙』の存在は大きかったのではないか。絵をふんだんに用い、戯作者山東京山によって平易な文章で著わされたこの案内記は、元禄期の漢文地誌に比してより広く流布し浸透する力をもっていたと考えるべきだろう。換言すれば『熱海地志』は、『熱海温泉図彙』にバトンを渡すことができたからこそ、近代まで命脈を保ったということである。

五　結語

ここまで『豆州熱海地志』を取り上げ、近世前期の地方地誌がいかに成立し、どのように流布するのかということについて、実例を挙げつつ探ってきた。

明らかになったのは、『熱海地志』が後続の地誌類に利用され続け、結果としてその源流である「温泉日新録」も明治に至るまで間接的に影響を及ぼしたという事実である。これはその情報としての利用しやすさ、すなわち平明で簡潔な叙述によるものであり、啓蒙的性格を有する林家周辺の詩文の特色が遺憾なく発揮されたのだと言うことができる。執筆動機や製作に至る背景が異なる官撰地誌の作者にも戯作者にも、必ずしも自覚的ではないにせよ流用された事実がそのことを物語っている。もっとも、秋峰の「日新録」の利用は、原文に登場する固有名詞もそのまま引用してしまうなど、先師の文章に寄り添い過ぎるその傾向は「利用」という観点からは疑問であり、こうした述作意識については、更なる検証が必要であろう。

もちろん、その多くを先達の文章から得ているからといって、秋峰による工夫が見られないというわけではなく、既述の寒川原清の様に断定的な調子ではないけれども、全体の特徴として和漢の書を駆使して（大半は漢籍）注釈を施そうという姿勢を指摘できる。たとえば、「碁盤石」に、

大明一統志曰、棋盤山在二天順府西三十五里一。上有二棊盤石一。俗傳、金章宗嘗奕二於此一、倭漢俗称相同

とある如くである。俗説を無批判に受け入れるのではなく、

客観的な傍証をもって一つ一つ精査してゆこうという、ここに見られる姿勢と同様の気風が顕著となるのは、白石良夫氏によれば宝永・正徳の交という。[36] それを代表するのが本稿でも度々言及した井沢蟠龍であるわけだが、その蟠龍が『熱海地志』を参考図書として使用し、自著『広益俗説弁』（正徳五年～享保十二年刊）に引用している[37]のは、実証主義的風潮がかかる地方地誌にも現れていることを示しており、非常に興味深い。秋峰は江戸初期に林家が担っていた啓蒙的役割が、次第に民間の知識人たちに移行してゆく過渡期にあって、その時代の移り変わりを体現している人物と捉えられないだろうか。

いずれにせよ、地誌の母体として林家の詩文が存在したということは着目すべきことである。ことは近世地誌を文芸作品として捉えることの有効性に関わるだけではない。周知の通り、林羅山や鵞峰などは地誌編纂に並々ならぬ意欲を見せており、[38] 林家の活動が近世前期の地誌の土台を築いたかと思わせる形跡すらある。少しく例を挙げるならば、岩城藩儒の手になる『熱海行記』（前掲）には、編者らが名所で詠んだ漢詩が多数載録され、その多くに鳳岡をはじめとする林家の門人達が添削をほどこしている。名所を詠む詩歌は言わば「土地の注釈」（雨野弥生氏）[39] であり、地誌への関心と無縁ではない。また、前期江戸地誌の代表作『江戸鹿子』（藤田理兵衛編、貞享四年刊）にはこれまた羅山・林梅洞・堀杏菴による江戸の八景詩・十二景詩が付され、さらには享保期の『江戸砂子』（菊岡沾凉編、享保十七年刊）にもたびたび羅山や鵞峰の詩文が考証の具とされることなども思い起こされる。今後は江戸地誌の源流について検討し、あわせて江戸八景詩などの成立と展開などについても、地誌との関連において明らかにしたいと考えている。

〔付記〕

本稿は二〇一二年度成城国文学会年度大会（二〇一二年十月二十日　於成城大学）での口頭発表をもとに再構成したものである。

席上、貴重な御助言を賜りました上野英二先生・宮崎修多先生に深謝申し上げます。また、所蔵資料の写真掲載を御許可いただいた各機関にも心より御礼申し上げます。

【注】

（1）　例えば、総合的なものでは、白井哲哉『日本近世地誌編纂

史研究』（思文閣出版、二〇〇四年二月）など。

（2）もっとも、秋里籬島とその作品を中心として精力的に調査・発表をされている藤川玲満氏や、文学・歴史学双方から広く近世の名所や風俗について研究する「都市風俗画研究会」（国文学研究資料館・国立歴史民俗博物館の共同研究）の活動もあり、状況は徐々にではあるが変化しつつある。

（3）拙稿「近世説話の生成一斑―菊岡沾涼『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌―」（成城国文学会編〔兼発行〕「成城国文学」25〔二〇〇九年三月二十三日〕）。

（4）前者「奇談」については、飯倉洋一氏の一連の御研究（近時のもののみ挙げれば、「近世文学の一領域としての「奇談」」〔日本文学協会編〔兼発行〕「日本文学」第六一巻第一〇号、二〇一二年十月十日〕）を、井沢蟠龍の「俗説弁」シリーズに代表される後者については、白石良夫氏の御研究（『江戸時代学芸史論考』〔三弥井書店、二〇〇〇年十二月〕）を参照のこと。いずれも、浮世草子衰退から読本誕生に至る文学史の空隙を埋めうるものとして重視される。

（5）稿者も拙稿「菊岡沾涼自筆『熱海志』（杏雨書屋蔵）について―解題と翻刻―」（「杏雨」第十五号〔武田科学振興財団、二〇一二年五月三十日〕）において触れたことがあるが、これとても断片的な紹介に過ぎない。

（6）序跋の印については、稿者は判読を怠っていたが、宮内庁所陵部蔵写本『豆州熱海地志』（大本一冊、正徳四年成、請求番号二一六―五七）に、これを解読した紙片が貼付されている（ただし、人見桃源序〔序文①〕の分を欠く）ので、参考までに挙げておく。秋峰自序のものから順に、「華谿／漁長」・「雲水／環居」（以上序文②）、「道／節」・「笠／翁」（以上跋文）。ただ、この読みの正否については今少し検証を要する。

なお、この写本は、「徳山愚人」こと周防徳山藩主毛利元次が作らせた板本の写しで、元次の跋文が新たに加えられる。それによれば、この文人大名は、熱海を風光明媚とする本書の内容に反駁し、秋峰の文章について徒らに文辞を弄するばかりで意味がなく、実景に即していないと酷評している。

（7）西川智泰著『真間の里』（亀井院、一九七〇年四月／増補改訂第六刷、二〇〇〇年二月）・保田晴男「鈴木修理日記――解説」（鈴木棠三・保田晴男編『未刊日記集成』第三巻〔三一書房、一九九八年五月〕）。後者には、秋峰とその父長常二代の日記『鈴木修理日記』六十巻の翻刻を収める（『未刊日記集成』第三巻～第六巻）。日記の引用はすべてこれによる。また、以下『日記』と略記する。

（8）「●長頼（ながより）　長兵衛　修理／寛文十一年八月二十八日はじめて嚴有院殿にまみえたてまつり、貞享三年十二月六日家を繼〔稿者注―祖父長次の項に、「これより御大工頭と稱し、後長温〔長頼の二代後〕にいたるまで代々この職をつとむ」とある〕」（『新訂寛政重修諸家譜』第十九〔続群書類従完成会、一九六六年一月〕）。

（9）墓石も現存するものの、墓誌は風雨による劣化で判読不可とのこと（亀井院談）。表には「寶永二乙酉十一月廿一日／秋峯院心月日觀居士／西岸院妙柳日影大姉／元禄四辛未八月十二日」とある。なお、稿者は判読できないという墓石裏面は実見することができていない。

（10）武鑑には御大工頭として「鈴木修理」（父長常のこと）の名で寛文十三年頃から載録され始め、貞享元年刊の『〔顕正景江戸鑑〕』あたりから、その隣に「子同　長兵衛」と記されるようになり、在所については前置される木原内匠のそれ

（神田橋外）に「同近所」などとされるのみで推移し、生前刊行の武鑑では転宅後の情報は確認できない（深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』〔原書房、一九九六年九月〕による）。ただし、屋敷替えの事実は『日記』だけでなく、『御府内往還其外沿革図書』（文化四～文久元年成）にも反映されている（朝倉治彦監修『江戸城下変遷絵図集』第15巻〔原書房、一九八六年九月〕）。

（11）岡本勝・雲英末雄編『新版　近世文学研究事典』（おうふう、二〇〇六年二月）「石田未得」の項（塩村耕氏執筆）。今その一例を掲出する。

巳刻、文庵老・意休・未琢同船、本庄江参、長常公御越、海福寺江参詣、有風呂、与次被参、未琢有俳諧吟、藤の花ざかり成けれバ、

深川の名にこそたてれふじのはな　　未琢

申后刻帰船、何も同道。

（『日記』巻四、延宝三年四月十七日条）

（12）人見桃原編『竹洞先生詩文集』前集（写本、宝永六年跋）巻十五所収「本朝外考序」による。原漢文。以下同様。なお、『竹洞先生詩文集』の引用は岩瀬文庫蔵本による。

（13）架蔵本による。原漢文。以下同様。

（14）本人のみならず周囲の人間も、秋峰については「秋峰鈴木氏、道に志し古へを好む」（前掲「本朝外考序」）・「古へを好み学を嗜むの深きに非ざるよりは、則ち何ぞ此くのごときに臻らん」（『倭賦引事』林鳳岡序文）などと、本文の内容に即した称揚の言辞であるとはいえ、歴史意識をもった人物として見ていたようである。また、菩提寺亀井院のある真間に、「真間井」・「継橋」・「真間娘子」（真間手児奈）という『万葉集』ゆかりの顕彰碑を建立した（元禄九年、前掲『真間の里』による）ことも、秋峰の「古」を好む態度の現われと言えよう。

（15）宮崎修多「古文辞流行前における林家の故事題詠について」（日本近世文学会編〔兼発行〕「近世文芸」61〔一九九五年一月二十日〕）。

（16）伊藤善隆氏は、「鈴木秋峰宛書簡・詩懐紙十一通」（「湘北紀要」第三十号〔湘北短期大学・図書館委員会、二〇〇九年三月三十一日〕）において、人見桃源・同香山（竹洞甥）・同鹿坡（竹洞次男）・塙宗柳（幕府医員）からの来簡を紹介されている。

（17）『日記』巻十。秋峰二十四歳。なお、元徳は竹洞の父。友元は竹洞の通称。

（18）『竹洞先生詩文集』前集巻十八「鈴木近江翁碑誌」による。

（19）『真間の里』は「人見家は、鈴木家の本邸五軒先隣に先代から居を構え、別邸が鈴木家と同じ葛飾郡牛島に在り、親交のあったことが碑銘に残されている」というが、この「鈴近江翁碑」の碑文にはそこまで具体的には記されていない。神田橋外の本邸同士の近接は、当時の絵図類（例えば遠近道印作『江戸方角安見図』〔延宝八年刊〕など）や『御府内往還其外沿革図書』で確認することができるものの、別邸については、何に拠った記述か不明であるので、更に調査が必要であるけれども、事実とすれば竹洞の「水竹深処」に秋峰が遊んだことも考えられる。

（20）『竹洞先生詩文集』に十八首、『桃源先生詩文集』（人見雪江編、写本、延享五年跋）に四首、『雪江集』（人見求編、写本、宝暦九年序）に一首、詩題から秋峰へ宛てたと判断できる物をそれぞれ見い出しうるが、その多くが秋峰からの来詩に応じたものである。秋峰自身の詩は日記にわずかに残されるのみで、全貌は窺いえない。

(21) 大庭卓也「「水竹深処」考」(「近世文芸」68〔一九九八年六月三十日〕)・同氏「山口素堂と江戸の儒者をめぐって」(俳文学会編〔兼発行〕「連歌俳諧研究」第百六号〔二〇〇四年二月二十八日〕)。

(22) 「脚疾」とは落馬の際に受けた傷のこと(「一今晩落馬致候付、岡道渓・高島喜庵呼遣、早速致療治」〔『日記』巻三十五、元禄十一年九月二十日条〕)で、その快復が思わしくなかったために、上司(小幡備中守・小出淡路守)に熱海湯治の希望を上申した上で許可を受け、元禄十二年四月四日に発足し同十四日に帰府していることが『日記』に具に記される。

(23) 随心と人見氏の関係は、竹洞の父元徳から始まっている。「瑞祥先生遺稿」(『雪江集』巻第十一「附録」)に、「壬寅秋、湯治の爲熱海に遊びし時、海邊に一僧草庵を占して隠居して住す。之を訪ふ序に其の故を問ふ。答へて云ふ、唯だ心の欲する所に随ひ、誠に心身清浄にして世路に拘らずして、天命の限り有る者を識ると。戯れに野詩一章を綴りて以て贈る」(原漢文、国立国会図書館蔵本による)と見える。

(24) 国立公文書館内閣文庫蔵(請求番号一九八―七九)。写本大本二巻二冊。伊豆山神社関係の文書類を集めたもの。「随心庵記」は下巻末尾に配されるが、目録には記されない。塚田博氏によれば、「『什物』は般若院(伊豆山神社別当―稿者注)四代目快盛によって整理された二十二点の文書をもとに、残りの文書を加えて成立したものと思われ、その成立時期は(中略)一七世紀後半から一八世紀前半の間と推定できる」という(「走湯山旧蔵文書についての一考察―『走湯山什物』の紹介を通して―」〔『史学論集』第二三号、駒沢大学大学院史学会、一九九三年四月三十日〕)。

(25) この印は、板本『武射必要』(寒川辰清著、享保十七年刊)自序(入江康平編『近世弓術関係刊行物資料その二』〈弓道資料集第九巻〉〔いなほ書房、一九九五年十一月〕による)・滋賀県立琵琶湖文化館蔵『近江輿地志略』(寒川辰清編)自序に捺されるものと同じものであり、それぞれの編者を同一人物と認定しうる証となる。なお、後者は著者自筆とされるので、これと『言種』本文の筆跡の比較検討が求められるけれども、大部な献上本に関してはその序文まで右筆の手になる場合があるので、その認定には注意を要する。

(26) 滋賀県教育会編『近江人物志』(文泉堂、一九一七年十一月〔のち臨川書店、一九八六年十月〕)、鎌田春雄著『近畿墓跡考』(大鐙閣、一九二二年六月)など。

(27) たとえば、「近江國膳所産士寒川辰清手書于慎思齋」(『本朝四民本伝』〔享保十五年刊〕自序)・「近江国膳所白梅野寒川辰清 謹序」(『武射必要』自序)など。前者の引用は矢口丹波記念文庫蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルムによる)による。

(28) 西尾市岩瀬文庫蔵『新井白石書簡集』なる写本(半紙本一冊)には、白石はじめ安積澹泊・土肥霞洲・寒川辰清(原清)などの書簡の写しを収録する(日付などは省略されている)。ここに見える澹泊から原清への書簡には、

一、頼朝卿天下之惣追補使を被願候段、全為自己にて朝廷是より致衰廃候。忠臣にて可有之候様、聊か無之事ニ御座候。然共我々共身の為には好キ事を被致置候

一、景憲事当時の軍記諸書に有之候通、冬陣ハ為間諜籠城、夏陣ハ寄手と成蹟ニ書申候。冬陣寄手ニ有て齋伊豆を助申候事なと諸書ニ無之儀、御紙面にて初而承知異聞を廣メ申候。如仰語類正説ニ可有之候 (以上抜粋)

などとあり、原清が国史に関する事実関係について、様々に

教示を願っていたらしき様が窺われ、彼の歴史研究への並々ならぬ熱意を見ることができる。

(29)「後年の文人・学者たちの紀行文は、またこの地誌によって説明をこころみることが多く、秋峰が果たした役割は、決して小さいものではない」(『熱海市史』上巻第四篇第三章)。

(30)　秋山冨南編、写本、寛政十二年自序。『日本輿地通志(五畿内志)』(享保二十・二十一年刊)の編者たる並河誠所の門人で、伊豆国安久村の名主であった冨南が、幕府に許可を得て編纂した伊豆国の地誌。公儀方が実地踏査の便宜をはかっており、なかば官撰地誌とも言いうる(注1『日本近世地誌編纂史研究』)。引用は高橋廣明監修『豆州志稿復刻版』(羽衣出版、二〇〇三年十一月)による。

(31)　山東京山編、岩瀬京水・渓斎英泉・歌川国安画、半紙本一巻一冊、自序、天保三年江戸山口屋藤兵衛刊。熱海在の人々からの依頼による作品で、集客を見込んだ宣伝のための案内記であり、『熱海地志』の影響下に成ったことが指摘される(高木元編『山東京山伝奇小説集』〈江戸怪異綺想文芸大系4〉(国書刊行会、二〇〇三年一月)解説(津田真弓氏執筆)。引用もこれによる)。

(32)　大内青巒編、半紙本一巻一冊、中村敬宇序、小野梓跋、明治十一年熱海真誠社刊。編者は曹洞宗の僧侶を経て後に還俗し、在俗主義の仏教者として活動した(小泉欽司編『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社、一九九四年十一月))。全体を地理・温泉・湯戸・山川名勝・社寺并行殿・産物の「六綱」に分類し、更に「五十九目」に細分化して立項した地誌。刊行者の真誠社は熱海の温泉宿。引用は架蔵本による。

(33)　豊島海城編・画、半紙本一巻一冊、自序、亀谷省軒題辞、明治二十一年熱海万屋平治郎刊。熱海への里程や温泉とその宿、効能・山川名所・神社仏閣など、先行書と同様の分類意識により整理され、特に「京山曰ク」として『熱海温泉図彙』を多く引用して、まま編者自ら考証する。本文の引用は架蔵本による。

(34)『熱海温泉図彙』が『熱海地志』を意識的に利用していたらしきことについては、津田真弓氏が既に指摘されている(同注31)。検証した記述の依存度から推せば、「京山、熱海へ逗留のうち、客舎の主、熱海の事を記したる一小冊を示す。下の説、往々其書に従ふ」(『熱海温泉図彙』「〇熱海形勝」)という記述に見える、執筆を依頼した熱海側が京山に与えた参考書が、ほかならぬ『熱海地志』であった可能性がある。

(35)「伊豆国、伊東の庄に、仏光寺といふ、此のいけに、三尺計の魚あり、うろこのいろ、るりのことし、きばハおゝかミのことく、くひ物を入れハ、かミくだく、其音たかし」(吉田幸一編『石川流宣画作集』下巻〔古典文庫、一九九五年九月〕)。

(36)　同注4。

(37)　正編巻二十「広益俗説弁引用書目」に「熱海地誌〔鈴木氏〕」と録され(白石良夫校訂『広益俗説弁』〈東洋文庫503〉〔平凡社、一九八九年六月〕)、遺編(享保二年刊)巻二十九「江尻(あえじりノうぇぼ)塩(しお)が池(いけ)の説」・残編(享保十二年刊)巻四十二「伊豆国碁盤石(ごばんいし)の説」に『豆州熱海地志』が引用される(白石良夫・浅佳子校訂『広益俗説弁続編』〈東洋文庫735〉〔平凡社、二〇〇五年二月〕)。特に前者では、秋峰がやはり漢籍を引いて、音声に反応して涌出する温泉の例を挙げていることに「考へしるべし」と評している。

(38)　羅山には「武州州学十二景」詩があり、狩野探幽などに絵をつがわせた同名の図巻(慶安元年跋、東京都江戸東京博物

館蔵）もあって、早い段階から「名所」に関心を寄せていたことがわかる（国立歴史民俗博物館文学研究資料館編『都市を描く―京都と江戸―』〈平成23年度人間文化研究機構連携展示図録〉〔人間文化研究機構、二〇一二年三月〕）。また、白井哲哉氏は保科正之編『会津風土記』（寛文六年成）が鵞峰らの日本地誌編纂構想を背景としていることを指摘されている（注1）。

（39）二〇一二年度第二回都市・風俗画研究会（二〇一二年七月十四日　於三省堂本社六〇一会議室）における稿者研究発表「江戸地誌と俳諧師の関係についての一考察」質疑応答時の御発言。

【図1】『豆州熱海地志』項目一覧

部門	項目	丁	分量
形勝門		1オ～	3.5
温泉門		4ウ～	3
	大湯	5オ～	
	平左衛門湯	6ウ	
	野中湯	6ウ	
	法齋湯	6ウ～	
	川原湯	7オ	
	水湯	7オ	
	風呂湯	7オ	
	瀧湯	7オ～	
山川門	伊豆山	7ウ	6.5
	上野山	7ウ～	
	念佛山	8オ	
	丸山	8ウ	
	日金山	8ウ～	
	初嶋	9オ～	
	大嶋	10オ～	
	錦巖窟	10ウ～	
	観音窟	12ウ	
	碁盤石	13オ	
	伊豆海	13オ	
	横磯	13オ	
	和田磯	13オ	
	絲川	13ウ	
	初川	13ウ	
	和田川	13ウ	
	業平井	13ウ	
	多賀一盃水	14オ	

部門	項目	丁	分量
神社門	湯前権現社	14オ～	8
	今宮権現社	15オ	
	七面大明神社	15オ～	
	木宮大明神社	15ウ	
	天神社	16オ	
	伊豆権現社	16オ～	
	下宮	20ウ～	
梵宇門	温泉寺	22ウ	2.5
	海蔵寺	22ウ	
	誓欣院	22ウ	
	大乗寺	22ウ	
	育王寺	22ウ	
	興禅寺	23オ～	
	臨江亭	24オ	
	湯川原地蔵堂	24オ	
	和田地蔵堂	24オ	
	土澤地蔵堂	24ウ	
	日金地蔵堂	24ウ	
	峠地蔵堂	24ウ	
	宮營遺迹	24ウ～	
土産門	海魚	25オ～	1.5
	川魚	25ウ	
	海介	25ウ	
	海苔	25ウ～	
	山禽	26オ	
	山獣	26オ	
	山菓	26オ	
	木器	26オ～	
	楊枝	26ウ	
	色紙	26ウ	

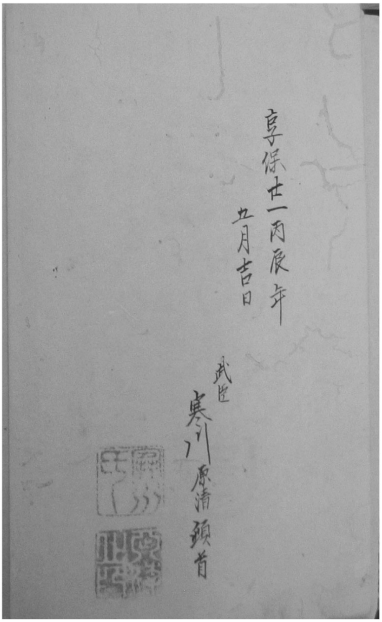
※「分量」の単位は丁。0.5は半丁を示す。ただし、数値は概算。

【図２】『豆州熱海地志』における「温泉日新録」引用箇所

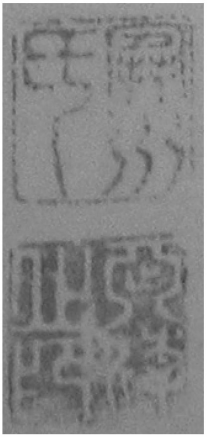
部門	項目	引用回数	備考（数字は引用部の通し番号）
形勝門		11	1,熱海三村 2,門河 3,土肥五村 4,巖谷 5,真鶴 6,赤澤村 7,根府川村 8,石橋村 9,網代浦 10,伊東 11,伊東の怪魚
温泉門		1	12,万巻上人故事
	瀧湯	2	13・14
山川門	初嶋	1	15
	錦巖窟	1	16 三十七行中三十五行が「日新録」からの引用。引用量最多。
	多賀一盃水	1	17 引用量最少。
神社門	木宮大明神社	2	18・19
梵宇門	宮營遺迹	1	20
土産門	海魚	1	21
	海苔	1	22

※備考欄の数字は引用部の通し番号。本文に項目名が備わらないものには、数字の後に仮に内容を示した。

【図3】
○熱海市立図書館蔵『熱海言種』（請求番号A二一〇―サム）
序文印記

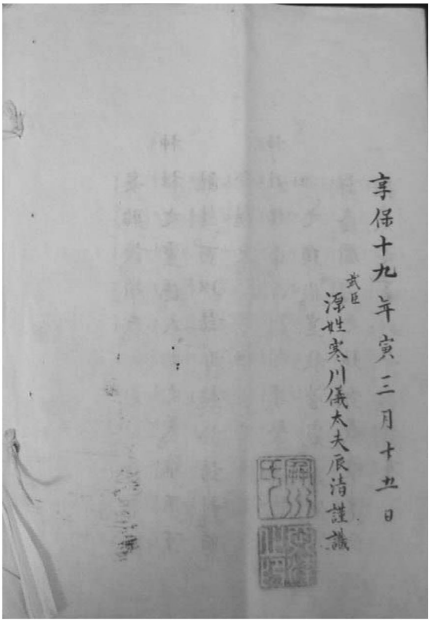


一部拡大



（寒川／氏・辰清／之印）

○滋賀県立琵琶湖文化館蔵『近江輿地志略』（請求番号七二六）
序文印記



一部拡大

（寒川／氏・辰清／之印）

【図４】『熱海言種』の加筆箇所

○『熱海地志』

部門	項目
形勝門	
温泉門	
	大湯
	平左衛門湯
	野中湯
	法齋湯
	川原湯
	水湯
	風呂湯
	瀧湯
山川門	伊豆山
	上野山
	念佛山
	丸山
	日金山
	初嶋
	大嶋
	錦巌窟
	観音窟
	碁盤石
	伊豆海
	横磯
	和田磯
	絲川
	初川
	和田川
	業平井
	多賀一盃水

○『熱海言種』

項目	加筆
	①米噛村の空海故事に評言加筆 ②石橋山の頼朝故事に評言加筆 ③仁田の仁田忠常故事に評言加筆
大湯	④温泉の湧出頻度の記述に「臣原清按ずるに」を加筆 ⑤入湯方法に諸注意加筆
平左衛門湯	⑥評言・類似例を加筆
野中湯	
法齋湯	
川原湯	
項目削除	
項目削除	
瀧湯	
伊豆山	
上野山	
念佛山	
丸山	
日金山	⑦『伊勢物語』九段の引用加筆
初嶋	
大嶋	
錦巌窟	⑧碁盤石の頼朝故事に評言加筆
項目削除	
項目削除	
伊豆海	
横磯	
和田磯	
絲川	
初川	
和田川	
業平井	⑨評言加筆
多賀一盃水	⑩評言加筆

【図４】『熱海言種』の加筆箇所（続き）

○『熱海地志』

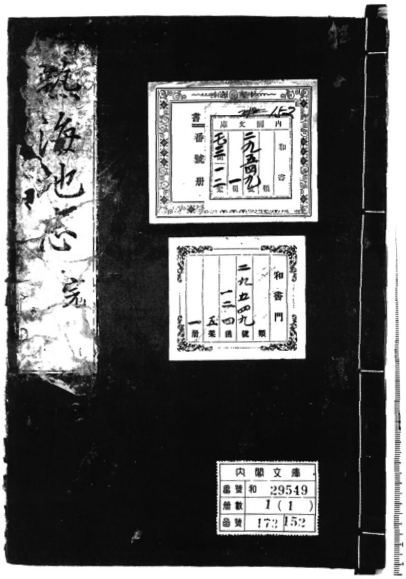
部門	項目
神社門	湯前権現社
	今宮権現社
	七面大明神社
	木宮大明神社
	天神社
	伊豆権現社
	下宮
梵宇門	温泉寺
	海蔵寺
	誓欣院
	大乗寺
	育王寺
	興禅寺
	臨江亭
	湯川原地蔵堂
	和田地蔵堂
	土澤地蔵堂
	日金地蔵堂
	峠地蔵堂
	宮營遺迹
土産門	海魚
	川魚
	海介
	海苔
	山禽
	山獣
	山菓
	木器
	楊枝
	色紙

項目移動

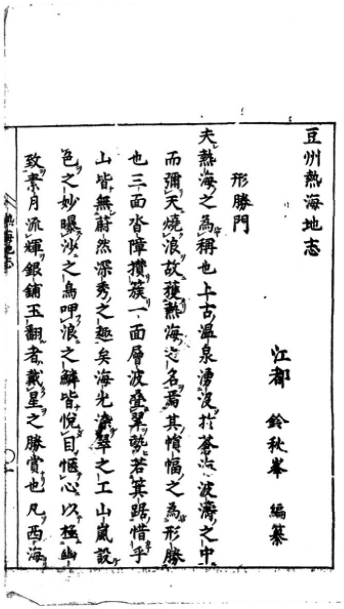
○『熱海言種』

項目	加筆
湯前権現社	⑪別称加筆
今宮権現社	
七面大明神社	
木宮大明神社	
天神社	
伊豆権現社	
下宮	
温泉寺	
海蔵寺	
誓欣院	
大乗寺	
育王寺	
興禅寺	
臨江亭	
宮營遺迹	
湯川原地蔵堂	
和田地蔵堂	⑫用字注釈加筆
土澤地蔵堂	
日金地蔵堂	
峠地蔵堂	
海魚	
川魚	
海介	
海苔	
山禽	
山獣	
山菓	
木器	
楊枝	
色紙	

【参考図版】



○内閣文庫蔵『熱海地志』（請求番号一七三―一五二）表紙

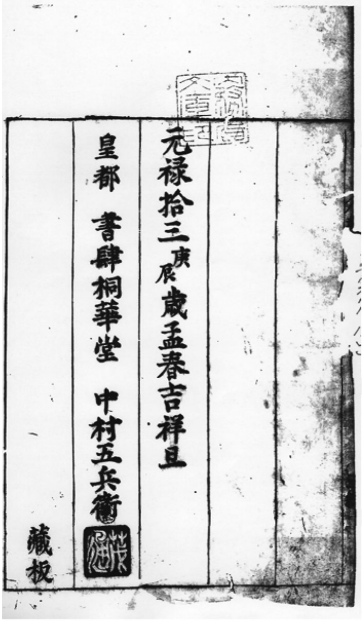

豆州熱海地志

江都　鈴秋峯　編纂

形勝門

夫熱海之為稱也上古温泉湧沒於蒼波滄溟之中而彌天燒浪故獲熱海之名焉其憤懣之為形勝也三面沓障攢簇一面層波疊翠巒若箕踞惜乎山皆無蔚然深秀之趣矣海光滄翠之工山嵐設色之妙暉沙之烏呷浪之鱗皆悅目恬心以極幽致素月流輝銀鋪玉翻者載星之勝賞也凡西海

○内閣文庫蔵『熱海地志』本文冒頭


元禄拾三庚辰歲孟春吉祥旦

皇都　書肆桐華堂　中村五兵衛

藏板

○内閣文庫蔵『熱海地志』（請求番号一七三―一五二）奥付

（ましま・のぞむ　本学民俗学研究所研究員）